

令和 6 年 6 月 3 日現在

機関番号：33921

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20024

研究課題名（和文）中上健次作品におけるアジア志向の再検討 韓国との文化交流を中心に

研究課題名（英文）Reexamination of the Asian orientation in Kenji Nakagami's works: Focusing on cultural exchange with South Korea

研究代表者

松田 樹 (Matsuda, Itsuki)

愛知淑徳大学・創造表現学部・助教

研究者番号：60966860

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：近年、日本近代文学が、東アジアという国際的な枠組みの下で論じられる機運が高まっている。だが、現在から三十年以上も前に、東アジアに広がる作品世界の構想や文学者同士の連帯を主張し、「新植民地主義」として批判を浴びた作家がいた。小説家・中上健次（1946-1992）である。本研究では、中上におけるアジア志向の内実を韓国との関わりから実証的に洗い直すとともに東アジアに広がる彼の活動を再検討することで、東アジアへと視野を広げた現代の日本文学史を構想し直すことを試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、東アジアに広がる中上健次の文学的構想を俎上に載せることで、1970年代から現代に至るまでの日本の作家・思想家における「アジア」の主題へと近接することができた。また、そこに見られるイデオロギー上の分断に対する批判意識や言語への固執という観点からは、同じく冷戦体制の下でナショナリズムの脱構築を志向した他の作家・思想家と共通する態度を看取することができた。このように、本研究では、今日の日本文学の基盤となる問題意識を中上が提示していたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In recent years, there has been increasing momentum to discuss modern Japanese literature within the international framework of East Asia. However, more than 30 years ago, there was a writer who was criticized for his "neo-colonialism" for envisioning a world of works that spread across East Asia and for advocating solidarity among literary scholars. This is the novelist Kenji Nakagami (1946-1992). In this study, we empirically reexamine Nakagami's Asian orientation from the perspective of his relationship with South Korea, and by reexamining his activities that spread across East Asia, we will explore contemporary Japanese literary history that has expanded its perspective to East Asia. I tried to reimagine it.

研究分野：日本文学

キーワード：中上健次 新植民地主義 アジア主義 日韓連帯運動 冷戦文化 大江健三郎 柄谷行人 ジャック・デリダ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、日本近代文学が、東アジアという国際的な枠組みの下で論じられる機運が高まっている。だが、現在から三十年以上も前に、東アジアに広がる作品世界の構想や文学者同士の連帯を主張し、「新植民地主義」として批判を浴びた作家がいた。小説家・中上健次(1946-1992)である。中上は後年、故郷の被差別部落から東アジア全域へと舞台を拡大してゆくとともに、とりわけ民主化以前の韓国で作家間の交流を演出し日韓文学の橋渡し役を担おうとした。しかし、彼の活動は軍事独裁体制を是認するとの政治的判断から無理解に晒されてきた。そこで本研究では、中上におけるアジア志向の内実を韓国との関わりから実証的に洗い直し、東アジアに広がる彼の活動を再検討する。これが達成されれば、韓国を始めとする東アジアへと視野を広げた現代日本文学史の基盤となりうる。

中上健次の作品は、これまで主に、故郷の被差別部落との関係性に焦点を当てて読解されてきた。柄谷行人や四方田犬彦といった中上に伴走した批評家は、部落差別を小説の題材に取り込んだ中上の実践を三島由紀夫ら先行作家に対する批判的応答と見做し、そこに日本近代文学の超克を見出してきた。それと相補的なのが、ジャーナリストの高澤秀次を始めとする論者による評伝的な研究である。柄谷や四方田とともに『中上健次全集』の編者を務めた高澤もやはり作家の出自から彼の作品を読み解いており、従来の中上研究では1970年代までの作品を中心に作家と故郷の被差別部落との関係性が主に論じられてきた。

このような傾向の下で、1980年代以降の東アジアを舞台とした中上の作品は、作家の生前から長らく批判的な評価が浴びせられてきた。それは自作の舞台をアジアの隣国に移し替えてゆく作家の振る舞いに、先行作での郷里に対する関心を投影した、植民地主義的な傾向が看取されてきたからである。

だが、実のところ、作家が部落問題を主題化してゆく過程は、韓国文化との邂逅に時期的に重なっている。中上において部落問題への関心はむしろ当初から東アジアの広がりの中で成立しており、晩年に顕在化してゆくアジアへの志向は作家の活動に底流し続けていたモチーフとして捉え直さねばならない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、中上健次が行なった韓国ソウルでの取材紀行や現地の文学者との交流の実態を精査することで、東アジアに広がるその活動から作家と出自との関係性を読み直すことである。これまで中上作品に見られるアジアへの志向は、彼が故郷の被差別部落に向けてきた関心を移し替えたものに過ぎないと捉えられ、郷里に舞台を置く先行作に比して1980年代以降のアジアに拡張されてゆく作品は等閑視されてきた。だが、それは中上が出自を主題化するプロセスに、韓国文化との邂逅が並走していたという事実によって覆される。この点を文献調査から実証的に明らかにしようとする本研究は、「被差別部落の出自を抱えた小説家」という従来の作家像を刷新するだけでなく、彼の活動を通じて現代日本文学を東アジアとりわけ韓国との国際交流の下で捉え直す足がかりとなりうる。

3. 研究の方法

本研究では、以下の三つの方法から研究を進めた。

第一に、作家の「アジア」にまつわる議論が当初から部落問題と関連して提出されていたものであることを明らかにした。具体的には、故郷の被差別部落を巡ったルポルタージュ『紀州』(1978)と韓国の古典や伝承を扱った紀行文「風景の向こうへ」(1978)を対照しながら読解を進めた。

第二に、韓国での中上の活動の実態と影響を明らかにした。具体的には、中上が『地の果て至上の時』(1983)という小説を連載していた韓国の文芸誌と、その周辺の韓国文壇に関する調査を行った。韓国滞在中の作家の著作を検討し直すことで、中上が実践していた日本近代文学批判の具体相とその韓国側の受容の様を辿った。

第三に、日韓の繋がりにから東アジアへの展開を跡付けた。具体的には、『天の歌』(1987)『讃歌』(1990)『異族』(1992)という後期作品に描かれた韓国朝鮮の姿を読み解いた。

4. 研究成果

研究成果は、主に二つの学会発表と二本の雑誌論文を通じて公にした。また、それに加えて関連するテーマの書評を学術雑誌に二本掲載した。

とりわけ、研究成果の中でも特筆すべきは、以下の二つのものである。

第一に、「いま、国家の脱構築? デリダ、レヴィナス、中上健次と「国民国家」と題した研究集会・シンポジウムを開催した。この研究集会では、それまで調査を行ってきた中上健次とアジアとの関係性を俎上に載せながらも、政治・哲学・文学といった領域横断的な観点から中上

とその周辺の試みを捉え直すことができた。また、その討論の成果は、翌年に論集として刊行した。

第二に、「九〇年前後、未了の日本文学 冷戦体制とグローバリズムのはざままで」と題したパネル発表を開催した。こちらもまた大江健三郎や安部公房といった作家の研究者らとの共同作業であり、それを通じてここまでの研究成果を日本の現代文学全般の課題として開く形で報告を行った。こちらも、次年度以降、順次発表内容を活字化してゆきたいと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 松田樹	4. 巻 3
2. 論文標題 特集・いま、国家の脱構築？ たった一つの、私のものではない「日本語」 ジャック・デリダ、中上健次、『批評空間』	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Supplements 特集・いま、国家の脱構築？ デリダ、レヴィナス、中上健次と「国民国家」	6. 最初と最後の頁 53-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 松田樹	4. 巻 第 期第2号
2. 論文標題 ゼロ年代以降の私小説 西村賢太から金原ひとみまで	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 紋説	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田樹	4. 巻 108
2. 論文標題 書評 渡邊英理『中上健次論』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松田樹	4. 巻 24
2. 論文標題 書評 高橋幸平・久保昭博・日高佳紀編『小説のフィクションリティ』	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 阪神近代文学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 松田樹
2. 発表標題 パネル発表 九〇年前後、未了の日本文学 冷戦体制とグローバリズムのはざままで
3. 学会等名 日本近代文学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 松田樹
2. 発表標題 日本語文学における「他者の単一言語使用」 中上健次と現代作家たちの場合
3. 学会等名 シンポジウム「いま、国家の脱構築？ デリダ、レヴィナス、中上健次と「国民国家」」（脱構築研究会共催）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------